

今日の脳性麻痺児や発達障害児の小児理学療法では、医療から生活へつなぐアプローチが求められ、医療機関から児童福祉法に基づく障害児通所事業、教育領域までを包括した生活支援の視点が理学療法士には不可欠である。本特集では、生活支援につなぐ小児理学療法を軸に重症児の呼吸管理から外来理学療法、そして社会資源である地域療育センターや児童デイサービス、訪問リハビリテーションなど生活支援につなぐ理学療法士としての取り組みと課題に焦点を当てた。

■呼吸管理を伴う重症心身障害児の小児理学療法と生活支援(山本奈月論文)

近年の医学の進歩により、呼吸管理が必要な重症心身障害児が増加してきている。そのような子どもと家族の生活支援を行う際には、「姿勢ケア」や「Family-centred service」の考えをもとに、彼らの生活のなかでの能力や必要性、欲求、願望などを環境因子も含めて包括的な評価と支援を行うことが必要不可欠である。私たち理学療法士には、彼らの「自立」に向けて適切で的確な援助者・家族の良き理解者となり、援助を継続していくことが求められている。

■発達障害児の小児理学療法と生活支援(楠 孝文, 他論文)

近年、発達障害児に対するリハビリテーション処方が増加しており、特に理学療法士に対して姿勢、バランスの問題や運動の不器用さを主訴とする発達性協調運動症/発達性協調運動障害(developmental coordination disorder: DCD)の児に処方されることが多い。本稿では、DCD児の姿勢運動の特性を、臨床経験と諸家の報告を概観しながら説明し、愛媛県立子ども療育センターで行っている理学療法を紹介した。

■一般病院における小児理学療法と生活支援(浅野大喜論文)

一般病院における生活支援を念頭に置いた小児理学療法の内容について、入院と外来に分けて解説し、介入の際の注意点や具体的な取り組みを紹介した。新生児集中治療室(neonatal intensive care unit: NICU)での介入では、対象児を家族の一員として発達する子どもとして捉え家族中心の介入を実施していくことが重要であり、また退院後の外来理学療法では脳損傷児の対症療法的介入だけでなく、予防的観点からの早期介入の重要性について述べた。

■地域療育センターにおける小児理学療法と生活支援(桑原知佳, 他論文)

地域療育センターは障害や発達の遅れをもつ児とその家族の生活支援の拠点として重要な役割を担い、近年、利用者は増加している。本稿では、筆者が勤務する横須賀市療育相談センターの概要と開設時からの利用者の傾向を示した。そして、理学療法業務および理学療法対象者の特徴を紹介し、療育センターで理学療法士が果たすべき役割と今後の課題について考えた。

■児童デイサービスにおける小児理学療法と生活支援(高橋昭彦, 他論文)

2012年に行われた法改正を境に、事業者数および利用者数とも急増を示し大きく変革しつつある児童デイサービスについて、根拠規定、運営規定、人員規定などを踏まえ、その現状を解説する。またNPO法人子どもの発達・学習を支援するリハビリテーション研究所が全国に先駆け運営を開始しているリハビリテーションを中核に置いた児童に対するデイサービス事業について、具体的なケースを提示しながら集団および個別の療育内容を紹介する。そのうえで、これからの児童デイサービス分野における理学療法士のかかわりについて言及する。

■常時医療ケアを必要とする子どもたちと家族への外出支援(神田雄生論文)

在宅で日常的に医療ケアを必要とする児は、その家族やきょうだいとともに出外の制限を受けることが多い。今回筆者は近隣地域の医師・看護師等の多職種と連携して、医療ケアが必要な子どもと家族が安心して外出できるイベントを企画・実行した。それと同時にボランティアや医療従事者への在宅小児医療の研修会も開催した。参加された家族の症例紹介を通し、外出をはじめとした、参加につながるアプローチや提案の必要性を考えていく。